

北越雪譜二編卷之四

目錄

- 異獸
- 法智法印
- 白鳥
- 浮島
- 美人
- 苗場山
- 鶴恩小報

通計十三條

- 火浣布
- 土中の船
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 峨眉山下標準
- 三四月の雪

小機こくわの上手うへありて問屋もんやより名なをききしとてさきさきいひしりし事ことに
 雪ゆきのまじりのつらなる窓まどのゆふ機くわを織おくゆふ窓まどの外とをきくを
 とまじく猿さるのやうな顔かほ赤あかくがけらの毛け長ながくしつらん人ひとよりの大
 のつらつらのいぢめけの此時家内このときうちうちの者ものいひしりし事ことに
 ぬまじりしつらなる機くわかかひのつらな腰こしかまた
 してつら物もののつらなるいぢめけのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ
 かきどのゆふをききしゆふ飯いひ櫃ぶか指さして飲のむゆふの娘むすめ此この異い獣じゆうの
 事ことをゆふ聞きくゆふ飯いひを握にぎりて二ふた三さんかちけりし事ことにけり
 持もちしりけりしゆふ家うちか人ひとのま時ときのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ
 後のちの馴なれし事ことをゆふいぢめけのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ
 急いそぎのちをききしゆふ折をりかけりし月つき水みづかゆふ事ことに御機屋ごくわや小入こいりの事こと
 ありし御機屋ごくわやの事こと初はつ手てを傳つたへ居ゐる日ひ限かぎは娘むすめのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ
 御機屋ごくわやの事こと初はつ手てを傳つたへ居ゐる日ひ限かぎは娘むすめのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ

此事このことを患うれひ歎なげきけり月つき中ちゆうより三日さんびつかあつる日ひの夕ゆふに家内うちうちのゆふの農のう
 業わざよりかつらざるをききしゆふやがゆふの久くかりゆふをききしゆふ娘むすめ人ひと
 のゆふゆふ月つき中ちゆうのゆふゆふをかつらつら粟飯あはひをゆふゆふありてあつてかき
 ぬまじりしつらなるいぢめけのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ
 けりしゆふ娘むすめは此夜このよより月つき中ちゆうをききしゆふいぢめけのつらなるいぢめけのつらなるいぢめけ
 身みをききしゆふ御機屋ごくわやを織お果はその父問屋ちちもんや持もち去さり往むかへしとていぢめけ
 娘時むすめときありしゆふ俄あはに紅潮べにうしほありしゆふゆふのあつてゆふ我われが歎なげきを聞きてかゆふ
 我われを助たすけしゆふと聞きく人ひとも不思議ふしぎのあつてゆふをききしゆふけりしと語り
 ちのころの山中やまのちゆうありてなまじりしゆふ見みるゆふのあつてゆふ一人ひとりゆふ連つらなる時ときハ
 形かたちを見せしゆふとて又高田たかたの藩士はんし材用ざいようありて樵夫しやうぶをききしゆふ黒姫山くろひめやま小入こいり
 小屋こやを作りしゆふ山やま小日こひをゆふゆふ時とき猿さる小似こにて猿さるありてゆふ物夜中ものよちゆう
 小屋こや小入こいりしゆふ焼火やきびありてゆふたけの六尺むさしをゆふ赤髮あかみげ裸身はだかみ通身とみ灰はい

山中異獸の圖



秋月養執之草

色めく毛の脱るふ似たり腰より下小枯草をまきふ此物よく人のふ
とふあふぐひくのちゆよく人の馴しと高田の人のくろき按ふ和漢三
戈圖會寓類の部小飛驒美濃あひの西国の深山も如件異獣ある事
をあるせりさむびりびの深山もあふものさむ

○火浣布

宝曆年中平賀鳩溪源火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の
古書を引本朝未曾有の奇工の誇り没しそのち其術つらう好
家の憾事とあるふ我國嘗火浣布を作るの石を産すその在る所
金城山。巻機山。苗場山。八海山その外もありその石軟弱しく爪を
しつても犯さばき不ぞの軟ある石ありしる青く黒くこまをくだけば
石綿を出る此石を得て試しふ石中小在る石綿といふもの木綿とを
細く袖するを三分わらふちりうするやうのものあり是を紡績する小秘術

ありて火浣布を造るなり其秘術を得ば小女子も火浣布を織るべし

○よん我驛中小箱荷屋喜右門といふもの石綿を紡績する事ふ千思

万慮を費し意ふ自らの術を得て火浣布を織りて又其頃我近

村大澤村の医師黒田玄鶴も同く火浣布を織る術を得たり各

秘しその術を入ふ傳へざるふなり時より村ついでに火浣

布の奇工を得たるも一奇事なり是文政四五年の間の事なり此兩

人の説をまきしふ力をつくは一丈以上あるも織らばあるも其機工容易

ありとより平賀源内六織を五六尺過ると火浣布考のいへりまは玄鶴が源

内ふまはりの事ハ玄鶴ハ火浣布の外ハ火浣紙火浣墨の二種を造

まり火浣墨を以て火浣紙ハ物をまき烈火ふけり火のりしをま

ふふしひり火氣をまき紙も字もまきのりしをまき其實用
をらば火浣布も火浣紙も火災の供ふ憑ぐりしんともまき火

鄂洲の僧无夢も尸を不埋丸髪ぶらみの長ながう義存ぎぞんも同トかりし

婦人の子こも摸もらじ

より丸髪ぶらみのぶらみじ

とて事ことハ五雜ござつ組ぐみ小

記きて枯骸こがいの確論くわくろんわ

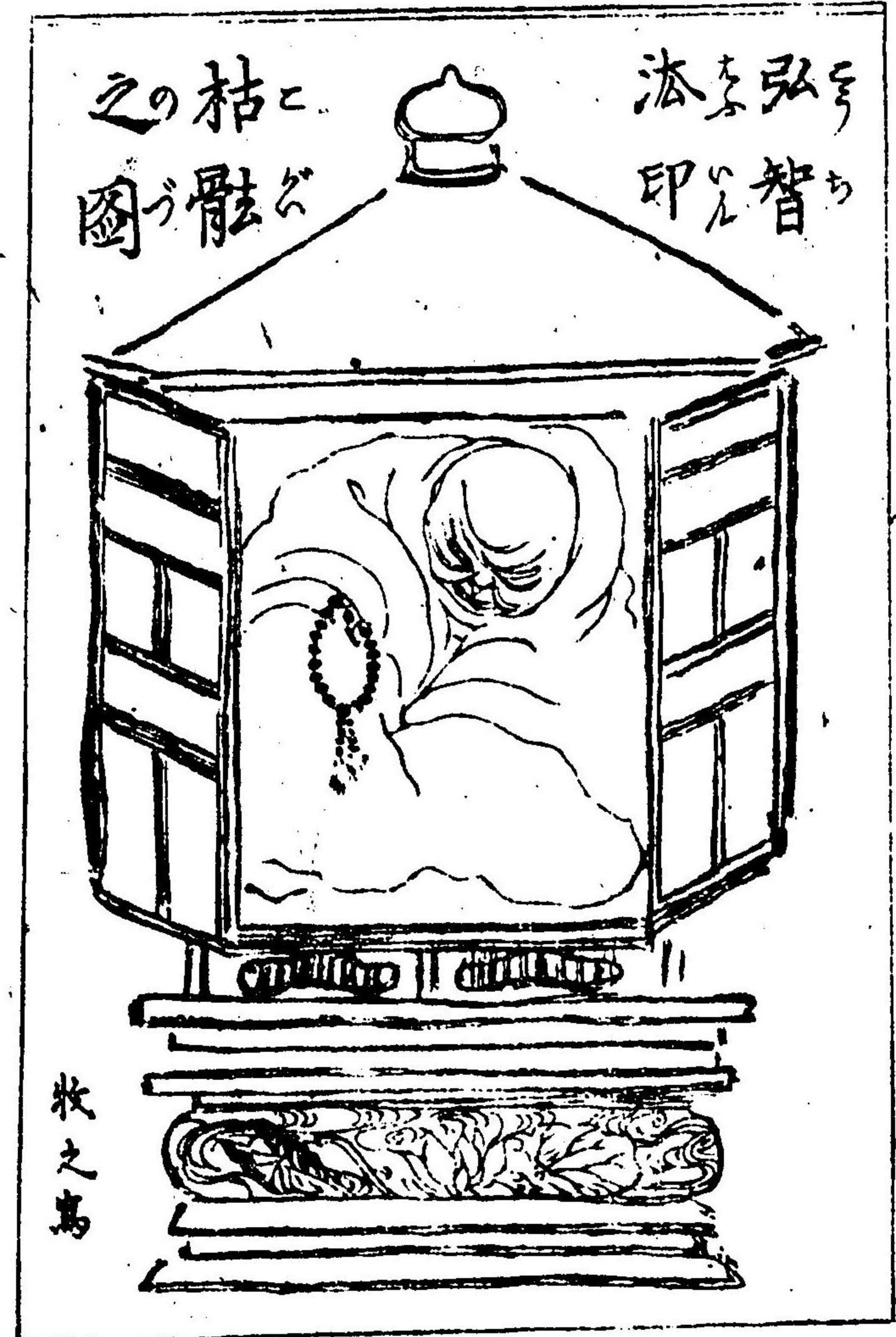
ととも親氏おやしを詰つふ

似にて説せめばばらら小

贅ぜいせせどど高僧こうそう傳でん小義

とと覺おぼししののいいんんくく

杖之鳥



土中の舟

蒲原郡五泉の在ざい一里いちりををりり下新田かむしんとのの村むらわわりり或幸あるさち此村このむらのの者ものもも夏なつあありり阿加川あかがわのの岸きしをを掘ほりり土中どちゆうよりより長なが三間さんかんををりりのの船ふねをを掘ほりり

全体ぜんたい少すくも腐くさび形かたち今いまのの船ふね小異こいののももああるる金具かねぐを用もちううへへきき処ところもも鯨くじらのの鬚ひげを用もちひひ寸鉄すんてつををままややじじ一いちつつ知しるる木きももまま何なにのの木きももをを弁べんももるる者ものああくくちちととくくハ異国いこくのの船ふねああんんととりりとともも余下よか越後えちご小遊せうゆうび
一いち時とき杉田村すぎのむら小野せの佐五右衛門さごえもんがが家いへああかかのの船ふねのの木きももくく作つくりりたるた硯箱えんばうを見み一いち小木質こけし漢産かんさんともともあありりととまま上かみ古漂流こひょうりゆうのの夷船えいせんああわわん

白鳥

前まへののりりるる如ごとくく雪譜ゆきふと題だいももののふふ他事たじををりり六哥ろくかふふりり落題らくだいああれ
と雪ゆきいいままとと末すえふふりりアア姑あはくくももひひららととふふままをを○天保三年てんぽう三年辰四月
我が住塩澤しほざわの中町なかつまち小鍵屋せうけんや某たががが家いへののわわららのの喬木たかきありり此樹このき小鳥せうちう巢すをを
むむままびび雛ひな稍しやうくく頭あたまををいいごごととりり巢すののららちち小鳥せうちう頭あたまのの鳥とりを見みるる主人しゆじん怪あまししとと
人ひとををししとと是こゝろをを捕とらふふ一いち小全身せうぜんしんハ鳥とり小こくく白しろくく紫眼むらさきまなこ足あしハ赤あかきき鳥とりのの雛ひな
りり人ひとくく奇あまととくく集あつりり觀みるる主人しゆじん俄あま小籠せうろうをを作つくるる心こゝろをを盡つくすすくく養やしひ

や長く鳴音鳥小異のくど我が近隣ある朝夕を觀す
 奇鳥ありて人多く江戸へ出く觀物せんか
 主人をてわさびかく其冬雪中ふり山の鮑を餌を食ふ人家ふきてり食をぬむ事雪中の常あり此の所為ふ筆
 白鳥の羽をり椽の下ありしとき初編の白熊の事を載
 たるゆゑ白鳥の事を記しぬ

○兩頭の蛇

文政十年庚の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端
 小兩頭の蛇を捕ふ長さ一尺ふたど七の頭二並びく枝をぬき
 のくさる常の蛇ふりてあるふまをさす箱ふり餌を
 三日を三日の蛇をりやありをたづぬりてさす

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村とありて小郡殿の池とて四方三町半
 の池ありて浮嶋十三あり晴天風ある時日出る十三の浮嶋ありて
 離散して池中遊ぶ如く日入る池の正中ふありて一ツの嶋とあり
 此池小種くの奇異ありて文多けり羽羽の浮嶋ありて記
 一人の知る処ありて此うき海あり人まきあり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面小社あり石打明神とあり昔より祀る処也
 その縁起ハ聞ゆるせり贅肉ありもの此神をり小石をりてを
 撫社の椽の下の蒲子の内の椽のしむく日ありて人の事
 奇妙ありてさるげり小石の形ありて人の圓り
 するぐり圓石とありて又奇妙ありて人の下小大の

小野の小町が如く美人の名をもあまほふ此美人を此僻地不出
 ず天公事を解さふ似たりと獨歎息しつ言んとあふ娘ハ
 去來とあふび柴籠をせおひうちつとあふけり目送る
 願越後あ美人多しと人の口實あふらふなり是無他水
 小よりのあありのささる織物の清白なる越後の白縮小勝さる
 ありことさる此邊ハ白縮を産する所あり以て其水の至清なる
 をあふ江河潔清あさる女小佳粟多しと謝肇淛がひひも
 理ありとあひつて旅宿小帰り云々の事あふ美人を視たりと若
 居小語りけと若居のあう渠ハ人の知る美女あり先生を他國の
 人と眼解欺くたさの火を借さるん可憎と「吾はあふとあふ
 吾たあふ火を借て美人ふらん烟をむさび」と戯言けと若居
 手を拍り大に笑ひ先生誤りうと屠者の娘ありと聞く再び

然より糞壤妖花を出せとあか事あふらふ
 ○再按小野の小町の相洲の郡目小野の良實の女あり楊貴妃ハ
 蜀洲の目戸元王の女あり和漢俱ハ北國の田舎娘世ハ美人の名を
 つる北方小佳人ありといひも北ハ陰位あり女小美粟を出せ
 ぬやあふん二代目の高尾ハ御野洲小生と初代の薄雲ハ信州小産人
 ともハ北都ハ名をあせりとも越後小件ハ美人を見りも北國
 のささる

○蛾眉山下橋柱

文政八年己酉十二月朔对郡越後推谷の漁人推谷の橋柱の
 海上小漁して一木の流と漂ふを見て斬ふせをやと拾ひ取て家小
 りの水を乾さんとも虎小立寄むを推谷の好事家通りかり是を
 見るとあふぬ木とあふ熱視小蛾眉山下橋柱といひ五大字刻あり

しをものつゝかの国の物とおひい漁人ぬ薪をうへてをひらげるとを
さて余が旧友觀劬上人推谷宗光田沢村強学の聞えあり嘗て好事の癖
あるを以てかの橋柱の文字を双鈞刊刻し同好の如く且橋柱の題
はる吟詠をといは是も又梓のく世に布んとせしむるが故のつゝし
不果の橋柱の後小御領主の御藏とありしを推谷に余が同国ある
ども幾里を隔てて其真物を見せしめ遺憾とを姑傳寫の圖を
以てして不載の。百樹曰牧之翁が此草稿のせしむる面を見せしめしむる所有
百樹曰了阿上人が和哥の友相場氏の推谷侯の殿人とまて上人
の紹介をのつゝ相場氏に對面して件の橋柱の事を尋ねし
余に謂し橋柱のありしを俗に書輪帛といふ物
を作ししを出一し其圖を示さる余が友の画人千春子が真
物を傍にひきき縮圖あり娥眉山下齋といふ五字ハ相場氏

こつゝ心を探りてうのききしとを下小圖を彫する人の頭を
左に顧せし下の五字を彫つてハ是より左に娥眉山下
橋ありし人小をのり標準ありとてしし是あり美理
渙然たり今俗に指をたてしとてのききしとをのり所を記
しつるを問する事あり和漢の俗情あり事ありのさへ此標
準を得ざる實事をまじふ北海の所の所も冬ふりしは常
北風烈し一磯の物をうらよもる推谷はなまのふとがしき所
ゆゑ貧民拾ひ取りし薪とをを事常ありあつるふ文政八酉の
十二月例の如く薪を拾ひ出し物ありし柱のごとく浪の漂ふ
をまじふ人の頭とを物あり甚兇惡あり貧民等懼しむる
さりののつげより見居らる此の竟に磯ふららあげしを
見く人々よりとなすふ文字のありしとて讀者あり是ハ何の

るんときめぐ評ト居るをり〜近き西禪院の童僧
 通りかゝり唐詩選めくわゆる蛾眉山の文字を讀て唐土の
 物ありときて貧民拾ひて持てのさる唐土の物ときて新め
 せり〜此事開傳〜竟る主君の藏ともの〜語
 ○按る小蛾眉山ハ唐土の北に在る峻岳也富士もく〜高山
 のり絶頂の峯双ま〜八字をあらわす蛾眉山とらあり此山の
 標準日本の北海へあがるときりたる其水路を詳究せん〜唐土
 歴代州郡沿革地圖不扱へ清国の道程圖中を檢する小蛾眉山
 ハ清朝の都を距こと日本道四百里許の北に在り此山に遠くを
 一條の大河東に流蛾眉山の麓の河に皆此大河に入る此大河
 瀘州を流と三峡のふ〜を過ぎ江漢に至り荆州に入り洞庭湖
 赤壁。潯陽江。揚子江の四大江に通〜江南を流洩りて東海

小入る是水路日本道五百里をりあり〜件の標準洪水ゆてや
 水小入りけん。洞庭。赤壁。潯陽。揚子の海の如き四大江を瀉漾周
 流〜朽沈む溜く〜水路五百餘里を流〜東海に入り巨濤小
 千倒〜風波小万顛を〜断断碎粉せを直身挺然〜我
 国の洋中漂ひ北海の地方に近より推谷の貧民拾ひて始〜
 水を辞と既不一爐の薪とある〜を幸ふ字を識者不遇ひ〜死灰を
 の〜韻客の為小題咏の美言を〜け〜の〜あ〜び〜
 推谷侯の愛を奉〜身を室庫小安ん〜万古不朽の洪福を
 保つ夏奇妙不思議の天幸あり〜實小稀世の珍物あり
 縮圖左のビと〜
 一丈餘 略二尺五寸餘 木質弁名〜



蛾眉山下喬

登苗場山之図

霄間清露湿衣中
衰際平蕪四望秋
呼吸極方通帝座
徘徊却憶問天人
吐息毛雲と也

かゝる舞臺の秋
秋月尾牧之

下十



信州千曲川

里

秋

山



雪譜二編卷之下

三十五

文溪堂藏

按むる小蛾城同韻 五何反 多と六相通 往く書見を橋を齋小
作ら頗る異体あり 依く明人黄元立が 字考正誤清人顧炎武が
亭林遺書中小在る 金石文字記あり 碑文摘奇 藤花亭十種
ありハ揚霖竹菴が 古今疑疑中の字體の部あり 通卷一遍 搜
索あり 齋の字あり 蛾眉山のあり 蜀の地ハ都を去る事
遠き僻境あり 推量する小田舎の標準あり 學者の書あり あり
あり 俗子の筆あり 我今の俗竹を竹といふ誤
の類 猶博識の説を俟つ

○苗場山

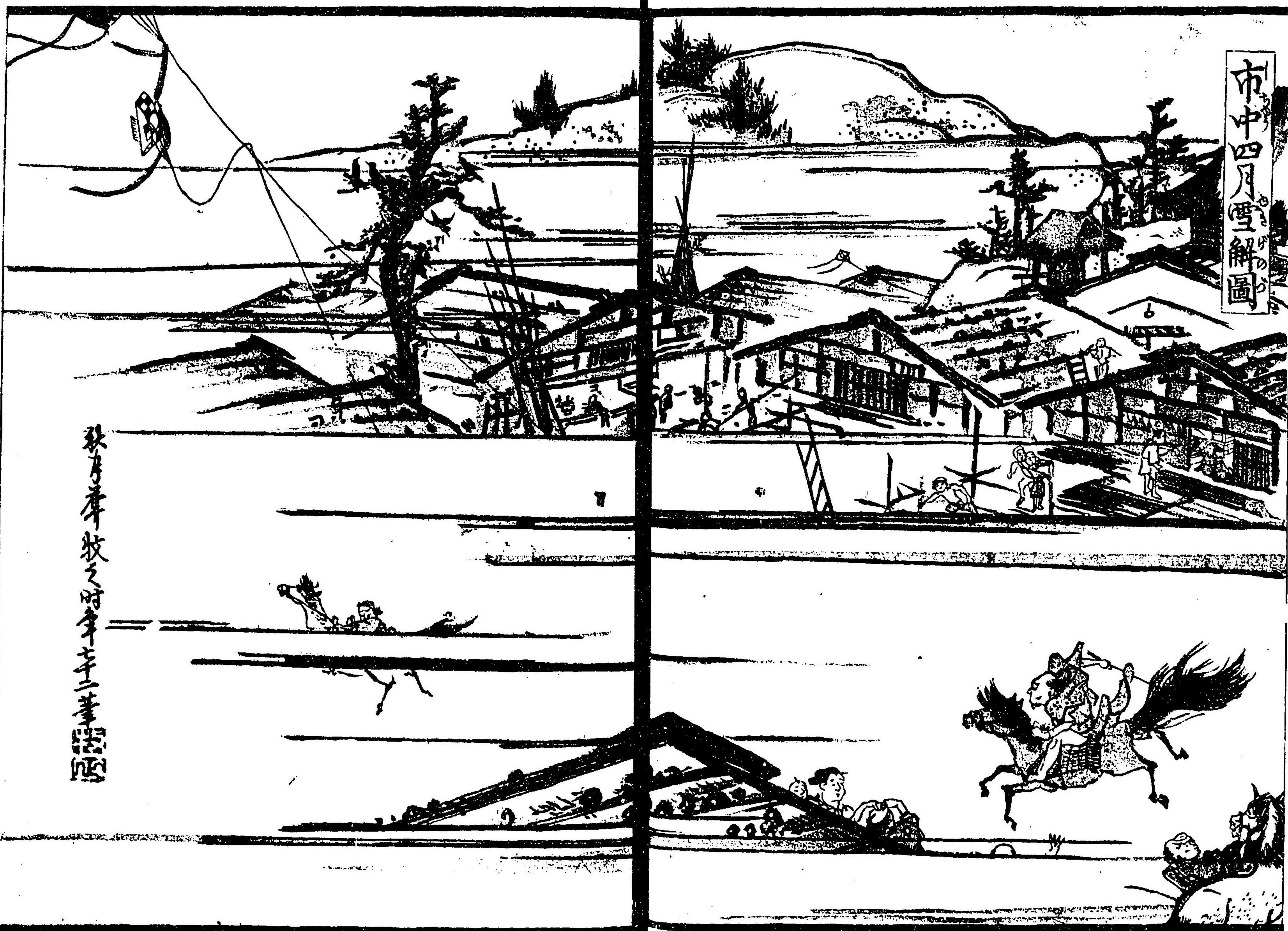
苗場山ハ越後第一の高山あり 登り二里とハ絶頂ハ天然の苗
田あり 依く昔より山の名小呼あり 峻岳の巔ハ苗田あり 事甚奇あり
余其奇跡を尋んとし 事半あり 小文化八年七月偶あり ならく

友人四人 嘯齋・頓齋 從僕等ハ食類其外用意の物をり 同月五日
未明ハならし 其日ハ三ツ候との驛ハ宿り 次日曉を侵し 此山の神職ハ
いりあり 旅をあり 案内者を備ふ 案内ハ白衣ハ幣を捧げ 先ハ
まむ 清津川を渉り 於て 兼ハ 峽道を踏 峻路ハ登り 小樹樹
森列し 日を遮り 山篠生ハ 茂りて 徑を塞ぐ 枯る老樹折し 路ハ
横り 之を踰るハ 卧竜を踏と 一條の溪河を渉り 猶登り 事半里
許 右ハ折し 左ハ曲り 奇木怪石 千態万狀 筆を以
て 已ハ 途ハ 鳥の声をきき 殆東西を弁し 道
道の案内者ハ 知りて 山篠を 幣を
さげ ちを示し 藤蔓登り 叢竹身を隠し 石高く 徑
徑狭く 一步ハ 平阻の 午を 頃山の半あり 僅
僅の平地を得 用意し 即座を 木蔭ハ 食を 暫く

憩てもこのやうして神樂岡と云ふ所の山より他木まゝ小
 ろく俗小唐松とのりの風ふたけそのをまゝに楢の雪霜も枯されん
 低き森をゆくかゝるかの山より御花園と云ふ
 所山極盛ひき百合桔梗石竹の花あまのさる人の植やあひふ似たり
 名をまゝに異草ありあり案内者小問ハ薬草ありと云ふ
 のかりゆきく棧跡ある道あつて岩ふとつき竹の根をカ草と
 一歩小一声を発しつゝ氣を張り汗をぬぐ一千年万苦一のかりつて
 馬の背との所ふらる左右千丈の谷ありあむ所僅小三三脚をあや
 まの時の身を粉砕ふるまゝに忙怖あつて竟小絶頂ふらつて
 ○諸同行十人まづ草ぬ坐して憩ふ時已小下晡ありまづ案内者の
 りひひ登り二里の險道あり一日小往來まゝとありて絶頂小小屋在
 らふのゆる人必その小屋小一宿する事ありと云ふり今その小屋をこゝに

木の枝山を枯草ぬと取りあつてまゝに匍匐入るまゝに作りた
 るハ野非人のまゝにまゝのまゝを今夜のやうにまゝにまゝにまゝに
 まゝに笑ふ僕まゝに枯枝をひひ石をまゝに假小灶をまゝに
 食物を調せんまゝにあひひ水をたぐひて茶をまゝに上戸ハ酒の燗を
 まゝに肥後越後まゝに淡間の湖まゝに信濃の連山まゝに眼下の波濤を千隈
 川の白き糸をひひ佐渡の青き盆石をまゝに船登の洲崎ハ蛾眉をまゝに越前
 の遠山ハ青嶽をまゝにまゝに眼を拭く杖葉第一の富士を視るまゝに
 まゝに雪の一握りを置か如一人ハ手を拍奇ありと呼び妙ありと称讚を千
 勝万景應接する小道あつて雲脚下小起るまゝに忽晴る日光眼を
 射る身ハ天外小在如く是絶頂ハ周一里まゝの莽々たる平光高抵の所
 を不見山の名ふまゝに苗場との所よりまゝにまゝにまゝに人のほろり
 する田の如き中小人の植ふるまゝに苗ぬ似ふる草まゝに苗代を半たり

市中四月雪解圖



秋有年牧之時年幸三筆

阪野陣之圖



長の太郎
 誠小遣ひ
 鎌倉より
 討手未せぬ
 阪野女大将
 とて遠く
 の軍小勝
 野陣を張る
 事ハ本支の
 あり文あわ
 けし人合の
 とす一圖を
 のし
 見書

観ふ供を
 けし軍器
 の時代ハ
 兼て
 訂志



三 府 書 肆

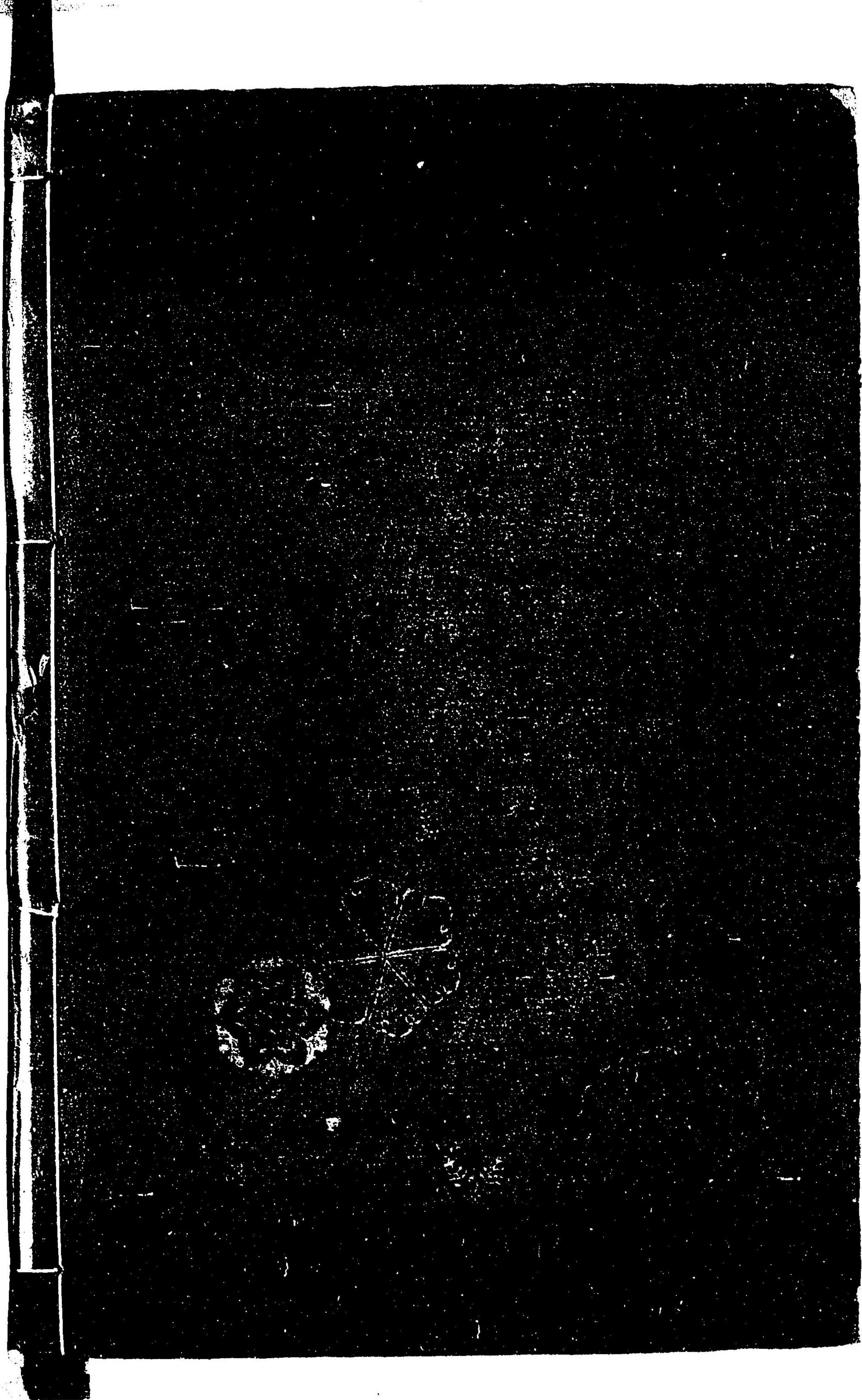
西京寺町通四條
 全 寺町通佛光寺上
 大坂北久太郎町四町目
 全 南久室寺町四町目
 全 北久室寺町四町目
 全 備後町四町目
 東京芝三嶋町
 全 通、二町目
 全 全 壹町目
 全 淺草茅町二丁目
 全 通、旗籠町
 全 本石町二丁目

田中治兵衛
 川勝德治郎
 柳原喜兵衛
 前川善兵衛
 前川源七郎
 吉岡平助
 山中市兵衛
 山田佐兵衛
 北田茂兵衛
 北澤伊八
 東生龜治郎
 江島喜兵衛

書 肆

常明水戸泉町
 磐城中村宇多川
 陸前仙臺國分町
 陸中一ノ關
 陸奥青森博勞町
 羽前山形六日町
 岩代福島通五町目
 武明 深谷驛
 全 所
 越後長門
 越後高田吳熊町
 越後四ノ谷濱科

松信善之助
 志賀茂卿
 伊勢安右衛門
 及川兵治郎
 柿崎忠兵衛
 市村五郎兵衛
 齋藤彦太郎
 小野脩三
 酒井省吾
 中村作平
 水多勝太郎
 佐藤友吉



139
7
146

東 京 圖 書 館				
七 冊	一 四 六 號	二 四 一 架	二 九 函	地 理 類 和 書 門

